

海外出張報告

WDSI 2001 (Western Decision Sciences Institute 2001)参加報告

表記の会議は2001年4月3日より5日まで、カナダのWestin Bayshore Hotelで開催された。当プロジェクトからは奈良由美子(京大拠点)が参加した。

当会議は組織論をベースとした主に欧米の研究者らによって年1回開催される国際会議である。当日は、企業、地方自治体、NGO・NPO等の様々な形態をとる組織における意思決定システムの問題点、情報の受発信と組織のあり方などについて、ケーススタディやサーベイリサーチなどを用いた実証的研究を中心とした研究発表および討議が行われた。

当会議において奈良による研究報告も行われた(論題: Campus Internet Information Ethics in Japan: An Empirical Study)。この報告に対して、組織論領域において企業倫理に関する研究は進んでいるものの、さまざまな組織形態における情報倫理についての理論的・実証的研究があまりなされていないことから、他の参加者から活発な質問・討議がなされ、今後のさらに積極的な研究にむけての期待とアドバイスを受けたことは有意義であった。

the Joint 9th IFSA (the North American Fuzzy Information Processing Society) Congress and the 20th NAFIPS (the International Fuzzy Systems Association) International Conference 参加報告

2001年7月25日から27日にかけて、奈良由美子(京大拠点)は、カナダのCoast Plaza Suite Hotel at Stanley Parkで開催された表記国際会議に参加した。

この国際会議は、IFSAとNAFIPSという二つの学会の協同開催である(このうちIFSAはファジィに関しては世界最大規模である)。人間の感性や推論方法を記述するのに適するファジー理論そのものの研究を始め、応用領域として経営学、言語学、心理学などの領域の研究者も参加し、システム分析・設計が進められている。

同会議において奈良による研究報告も行われた(論題: Decision Trees as a Model as Chance Perception)。情報(データ)と人間との相互作用に関する研究であり、リスク/チャンスの認知モデルを、理論的考察により決定木モデルに発展させ、実際の社会調査データのマイニング結果からのリスク/チャンス認知が同モデルと適合していることを検証したものである。このほかにも人間と情報との関わりに焦点を据えた研究報告および討論が活発になされ、各国の研究者たちと意見交流ができたことは有益であった。

(以上、文責: 大阪教育大学教育学部助教授 奈良由美子)

英国・スウェーデン報告(2001年9月15~28日)

去る2001年9月15日から28日まで、英国とスウェーデンへの出張を行った。主な目的は二つあり、一つはロンドンで行われた医療倫理学講座(The Annual Intensive course on Medical Ethics, 17-21 Sep 2001, Imperial College, London)に参加し医療倫理学一般の最近の話題について理解を深めること、もう一つは英国・スウェーデンの二国における医療情報の扱い、とくに診療情報の活用と遺伝子情報の扱いに関する

調査と資料収集を行うことであった。主な日程は次の通りである。

2001 年 9 月 15 日	日本を出国
同 16 日～21 日	ロンドンのインペリアル・カレッジにて医療倫理学公開集中講座に参加。 医療倫理学一般と診療情報の活用・規制に関する討議および資料収集
同 22 日	スウェーデン着。ストックホルムのカロリンスカ医科大学図書館、および ヨーテボリ大学哲学科にて、医療情報・遺伝子情報の扱いにする調査と資料収集
同 28 日	帰国

ロンドンで開催された医療倫理講座とは、インペリアル・カレッジの Raanan Gillon 教授が全体のコーディネーターをつとめる 5 日間集中の公開講座である。英国内外の医療関係者や医療政策の担当者、医療倫理の専門家などが 80 名ほど参加し、講義と討論のセット形式で行われた。米国において発生したテロ事件の直後であったため、米国から招かれる予定であった数人の講師は訪英できなかったものの、代理の講師を含めた豊富な講師陣により多様なトピックが扱われ、各セッションごとに必ずグループ・ディスカッションが行われた。スケジュールは次の通りである(括弧内は講師陣の名前)。

第一日目	講座についての説明と、医療倫理の諸問題、倫理学、主な規範倫理学説(義務論とヘア流の選好功利主義)についての入門的解説(Prof. Raanan Gillon、Prof. David Raphael、Dr. Piers Benn)
第二日目	医療倫理の四原則(善行、無危害、自律尊重、公平性)の解説(Prof. Gillon)、意識の有無とヒトと人格(パーソン)をめぐる議論(Prof. John Harris)、生命を終わらせること(Fr Brandan Callaghan)、安楽死の法と倫理(Prof. Derek Morgan)
第三日目	パターンリズムと自律の尊重 (Dr Bobbie Farsides)、告知(Prof. Roger Higgs)、個々の具体的な事例についての自由討論
第四日目	精神医学研究における倫理(Prof. K. W. M. Fulford)、臓器移植の現状と問題(Dr. Robert Sells)、医療における公平性(Prof. Len Doyal)
第五日目	人権の尊重と医療倫理の問題(prof. Nathanson & Sommerville)、医療配分(Dr. Neville Hicks)、医療倫理教育(Dr. Michael Parker) 最終討議(当講座についての評価、フロアからの意見聴取)

印象的であったのは、倫理学理論と具体的問題とが均等に取り扱われ、講じられた点である。倫理学の代表的理論がかなり本格的に解説され、かつ、現場の臓器移植医や精神科医によって具体的な医療現場の諸問題が提示され、個別に論議された。FINE の出張目的を果す上で役立ったことは、英国内外の医療倫理の大まかな理念と、講座に参加した多くの英国内外の医師たちの考え方に接することができた点である。スケジュールは密であったが、休み時間を利用して市街の保健局や病院、医学図書館等を訪れ、現地で配布されているカルテ開示関連の資料その他の資料収集も行った。

スウェーデンにおいては、実践哲学を専門とし、遺伝子カウンセリングや遺伝子研究をめぐる生命倫理の委員会や研究プロジェクトのメンバーなどもつとめておられるヨーテボリ大学哲学科の Christian Munthe 助教授を訪ね、これらの問題に関するスウェーデンでの取り組みと氏の見解を伺い、論議させてい

いただいた。また別の日にはストックホルムのカロリンスカ医科大学図書館を訪れ、情報管理の専門家である Christine Wickman 氏に、同図書館がオンラインで提供している医療情報の内容とその検索方法、情報提供の方針などについて懇切丁寧に教えていただいた。その後、同医科大学の付属病院に移動し、その看護部図書室では Kerstin Karlstrom 氏に御協力いただいて、ほぼ半日をかけて、スウェーデンと北欧における医療情報倫理の文献・記事を大量にリストアップし、入手可能な資料をコピーで収集した。その中には、今回の情報倫理資料集 IV で取り上げた、アイスランドのデータベース計画をめぐる貴重な論議が記録された Nordic Council の書籍(北欧で 1000 部のみ出版されたものである)も含まれている。なお、私からの依頼を受けてこれらの訪問スケジュールを組んで下さったのは、同医科大学図書館の Lotta Haglund 氏である(同氏は、私の訪問当時は休暇で日本を訪れていたため、実際には御会いしていない)。これらの方々には心より感謝している。

この海外出張を通じて得られた研究成果については、今回の情報倫理資料集 IV に寄稿した二つの論文を御覧いただければ幸いである。

(以上、文責：九州大学大学院人文科学研究院助教授 奥野満里子)

ETHICOMP 2001

ETHICOMP 2001: "Systems of the Information Society", Hosted by Faculty of Electronics, Telecommunications and Informatics Technical University of Gdansk, Gdansk, Poland. In association with Centre for Computing and Social Responsibility De Montfort University, UK, Research Center on Computing and Society Southern Connecticut State University, USA.

2001 年 6 月 18 日から 20 日にかけて ETHICOMP (THE SOCIAL AND ETHICAL IMPACTS OF INFORMATION AND COMMUNICATION TECHNOLOGIES: 情報技術の社会的・倫理的問題に関する国際学会) が、ポーランドのグダニスク工科大学にて開催された。FINE プロジェクトからは、京都拠点のメンバー 3 名が参加し、2 名が研究発表を行った。報告のひとつは、辰己丈夫氏(神戸大学発達科学部講師)によるもので、Who can own and use his/her history of WBT? というテーマであった。概要としては、教育現場への導入が進んでいる WBT(Web Based Training) と呼ばれるコンピュータを利用した教育システムをめぐる情報倫理上の問題、特に WBT を利用することで集積された学習データのプライバシーについて、著作権とのアナロジーに基づきながらデータ活用の倫理問題をまとめたものであった。もうひとつは、板井孝太郎(京都大学リサーチアソシエイト)による Medical Informatics and Information Ethics —Privacy Policy in the Age of Taylor-Made Medicine という、医療情報に関する報告で、米国における HIPPA 法の動向と、ヨーロッパにおける電子医療情報の保護政策との相違点をまとめ、その上で電子ネットワーク上で医療情報を共有する上での情報倫理的課題を整理したものであった。特にネットワーク・セキュリティにのつての真の脅威は、外部からの不正アクセスだけでなく、むしろ内部関係者(trusted insider)による情報漏洩にあることを論じ、医師や看護師だけでなく、事務職員を含めたすべての病院職員に対する情報倫理教育の重要性を強調した内容であった。

(以上、文責：宮崎医科大学医学部講師 板井孝太郎)

*なお、水谷、園田、亀田による大韓民国出張報告については水谷記事の 3 を見られたい。